

(三)

いくつかのエピソード

石井 穆

一九八六年三月にミキ学長を囲んだ学科会で、学園訓の意味を約1時間半にわたって伺った録音テープが今手元にある。それを聞き直してみても、非常に張りのあるお元氣な声の活き活きとした当時の学長の姿が彷彿と蘇返った思いがする。

さて、本稿では、ミキ先生にまつわるエピソードをいくつか拾って、当時を偲んで見たいと思う。

まず、学生部の担当であった昭和五十七～五十八年の頃と昭和六十三年～平成元年の頃、夜も明けきらぬ相当早朝の学長からの電話に、何か事件でもあったのかとびっくりして飛び起き、お話を伺うと、すぐに対処しなければならぬ問題ではないけれど、これこれのことについて学生の指導をこうして欲しいというご意見であったことなどが何度もあり、それが非常に強い印象として記憶に残っている。ミキ先生のこのように思い立ったら直ぐに行動

一、大学人としてともに生きて

しないと気がすまない一途なお気持ちだが、こういったところに顕れたのでしょうか。学生を思う教育者としての非常に激しく厳しい面の現れであるのかとも思う。

次に、今も小講堂に掛かっている緞帳を染め直した思い出。校章が刺繍してあるえんじ色の古い緞帳が日焼けして色があせていた。この色を再生出来ないかとのミキ先生のご依頼で、染め直してみることとなった。これはミキ先生にとって大変愛着があり捨てるに忍びないものであるとお気持ちごひしひしと感じられたので、やってみることにした。ただ、大きく重いものであるで、これを染める装置がない。やむをえず、ステンレスの大きな流し台に染料の液を張って、そこに緞帳全体を浸漬した。次に、折り畳んで太いガラス棒に掛けた緞帳を、底に水を少量入れたドラム缶の中に吊るして、ガスバーナーで加熱してスチーミングをした。このように、大きなものをそのまま染めるのには、些か無理があつたので、十分良く出来たとは思われないが、ミキ先生にはこれが大層喜んで頂けた。今でも、小講堂で役目を果たしているところである。

もう一つ、これも、ミキ先生の物を大切にするという思いの一つの現れである。長年、寮の食堂や大学のホールで使われて来た、プラスチック製の茶碗が変色して汚くなっていた。こうなれば普通は廃棄するところであるが、それを何とか再生できないかという、ご依頼である。実験室で、酸化漂白剤で漂白したが、思うように綺麗にならない。そこで、還元漂白剤で、しかもかなり過酷な条件で処理したところ、相当綺麗になった。これも、その後、いくばくかのお役に立ったようである。

このようなエピソードは、他にもこの学園の中では数えきれないほどあると思うが、ここでは、わたしが関わったことを記して、ミキ先生を偲ぶよすがとしたい。